

文化学園服飾博物館だより

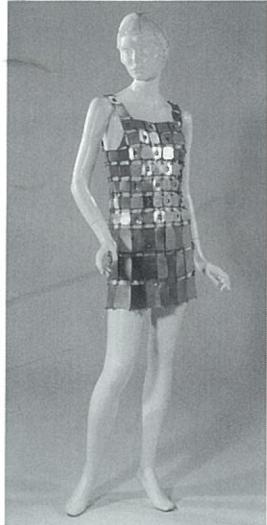
第9号 1996.4.1



小直衣 久邇宮家旧蔵 江戸時代末



ドレス フォルチュニイ
1920-30年代



ドレス パコ・ラバンヌ
1968年頃



上 衣 (松島コレクション)

◇'95年度資料収集について◇

服飾博物館の収集は質に重点を置き、体系的に見て不足の部分を補う方向で進めています。

'95年度の主な収集品は次の通りです。「日本」は近年では得難い童形束帯、小直衣、桂といった装束類を集めることができました。「西洋」は20世紀のデザイナーを中心にパコ・ラバンヌ、スキヤパレリ、フォルチュニイ、ジャン・デッセらのドレスを収集いたしました。「アジア・その他の地域」では、中国、中近東各地、収蔵資料の少なかったアフリカ、さらに南アジアや中東の染織品の収集家だった故松島きよえさんのコレクションが加わりました。松島コレクションは主に敷物、掛布などの染織品と衣服、装身具からなり、自ら現地に入り込んで収集された膨大な資料は、整理が進むにつれて当館にとって貴重なコレクションとなるでしょう。

寄贈資料および寄贈者につきましては次の通りです。収集にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。
■：着物、帯、羽織他、■：文官大礼服、フロックコート、■：ジャケット、
スーツ他、■：子供用祝着、印半纏用布地、■：フロックコート、国民服他、■：
髪飾り、帯、着物、履物他、■：インカ裂、■：中国の袋物、■：背心、チマ・チヨゴリ、■：
レース製テーブルクロス他、■：1920年代のドレス、チャイナドレス他、■：
着物、帯、羽織他、■：モーニングコート、山高帽子他(敬称は略させていただきました)

'95年度活動報告

◇展 示◇

【庶民の服飾】 3月8日～5月12日

これまであまり取り上げることのなかった明治時代から昭和初期にかけての庶民関係の服飾を紹介。日常着としての縞・絣・絞り染の着物、刺し子・こぎん・裂織などの仕事着、晴れの服飾である子供祝着、祭衣装、大漁着などで構成いたしました。様々な物があふれ、豊かな生活に慣れきってしまっている現在、庶民の服飾に見られる素朴さ、ものを大切にする心、時間をかけた丁寧な仕事などは、見学者に強く訴えたようです。なお、4月14日には三笠宮崇仁殿下、百合子妃殿下がご来館下さり、熱心にご見学いただきました。



ご見学の三笠宮両殿下

【中国の服飾 ～清朝末期の宮廷衣装を中心に～】

6月10日～9月14日

戦前に現地で収集された清朝末期から中華民国初めにかけての服飾を中心に展示いたしました。宮廷衣装から庶民の服飾にいたる多種多様な服飾を「宮廷衣装と富裕階級の服飾」、「庶民階級の服飾」の二つのテーマに分け、さらに清朝を築いた満州族とつながりの深いモンゴル族の服飾を取り上げました。多岐にわたって中国の服飾を紹介する展覧会は珍しいため、遠方から多くの方々にご来館いただきました。



皇帝の龍袍

【西洋の服飾 ～シルエットとディテール～】

10月13日～12月8日

館蔵品の中から西洋の服飾を取り上げ、18世紀のロココ時代から20世紀にかけての各スタイル、現代のオートクチュールのデザイナーまでの約200年間にわたるドレスの変遷をたどりました。また帽子や靴、バッグなどトータルな装いを作り出すための様々な付属品にも着目し展示いたしました。200年の服飾の流れをまとめたリーフレットと、新しく試みた薄葉紙を使ったマネキンの髪形が好評でした。



1950,60年代のドレス

【外衣と風土】 1月19日～3月14日

世界各地のそれぞれの環境により多彩な展開をとげてきた外衣を三つの地域に分けて展示。「日本」は被衣、羽織、合羽、和装コートなど、「アジアその他の地域」は、韓国、中近東、ナイジェリア、アンデス地方の気候や習慣に根ざした様々な形態や素材のコートやヴェールを、「西洋」は儀礼用の祭服やガウン、19世紀末から20世紀半ばまでの女性用のケープやイヴニング・コートなどをそれぞれ紹介いたしました。



ナイジェリアの男性用外衣

◇ヨルダンとの交流◇

服飾博物館では'93年に開催した『パレスチナとヨルダンの民族衣装』展以来、ヨルダンとの交流を深めています。'95年5月に行われたヨルダンウイークでは、『ヨルダン総合展』に協力し、ヨルダンの各地方の民族衣装とベドウィンのテントを貸出しました。5月25日にはヨルダンウイーク開催に合わせて来日された、ヨルダン・ハシミテ王国のサルワット皇太子妃殿下とラフマ王女にご訪問いただきました。さらに'96年1月には学園訪問の記念として金製の装身具をご寄贈いただきました。また、6月にヨルダンで催されるジャパンウイークにも協力、参加する予定です。



学園ご訪問のサルワット皇太子妃殿下



ご寄贈いただいた金製装身具

◇『アジア民族文化フォーラム・'95東北アジア年』に協力◇

アジアへの視野の拡大、アジアの一員としての日本を考える『アジア民族文化フォーラム』（同実行委員会・アジア民族造形文化研究所主催）に今年も協力いたしました。

7月15日の講演会「服飾から見た東北アジアの伝統」では、道明・博物館学芸室長が清朝末期の宮廷衣装について、文化女子大学教務部の朱傑さんが中国現代ファッショング事情について、さらに北京服装大学の唐緒祥先生が少数民族の身体装飾についてそれぞれ語られ、研究や体験を通した生き生きとした内容に参加者も聞き入っていました。続いて『中国の服飾』の展示説明を吉村・学芸員がいたしました。

10月21日のシンポジウム「無形文化財の保存と振興」は、河東哲夫・外務省文化交流部参事官、崎谷康文・文化庁文化財保護部長、大滝幹夫・文化庁主任文化財調査官、遠藤善久・通商産業省生活産業局日用品課長、滝田頃一・陶芸家・沖縄県立芸術大学教授、金子量重・アジア民族造形文化研究所所長をパネリストに、アジアの伝統文化をひとつのネットワークで結ぼうという大きな構想から、後継者不足に悩む伝統工芸の現状まで各方面的具体的な活動や課題について報告されました。実際にもの作りに携わろうとする学生からの質問にパネリストの方々も熱心にお答え下さり、有意義な機会になりました。



講演中の唐緒祥先生

◇資料の館外貸出◇

近年、外部の博物館から当館の所蔵品借出の要望が多くなっています。デリケートな服飾資料の貸出は慎重に行われなければなりませんが、より多くの人に見ていただくために、今年度は次のように他館の展示に協力をいたしました。

伊勢丹美術館	「20世紀ファッション展」	5/18~30 ドレス5点、扇、靴、バッグ各1点
西武百貨店 池袋店 ロフトフォーラム	「ヨルダン総合展」	5/23~29 ヨルダン民族衣装19種、テント1式
国立西洋美術館	「描かれた不思議な世界を旅する ～こどものための展示～」	7/11~9/10 ドレス1点、帽子1点
埼玉県立近代美術館	「李王朝時代の刺繡と布 ～希いをぬう 喜びをつなぐ～」	8/12~9/24 女子宮廷服 1式
徳島市立徳島城博物館	「蜂須賀家の甲冑～武家の象徴～」	10/12~11/12 錦包腹巻1具
東京都庭園美術館	「旧朝香宮邸のアール・デコ」	2/24~3/24 陸軍中将正装、女子大礼服

博物館所蔵資料の総点数について

日頃、博物館の所蔵資料の総点数についてたずねられることが多くありますが、これがなかなか難問です。まず、何を1点とするかですが、スーツの場合、上着とスカートで2点とする考え方と、スーツとして1点とする考え方があります。また、十二単の場合、小物まで含めると10点余りで構成されていますが、セットとして数えれば1点となります。そして、場合によってはセットの一部のみが収集されることもあります。さらに、織物の断片が張られた裂帖の場合、断片のそれぞれ1枚ずつを1点と数えることもできますが、裂帖自体を1点とすることも考えられます。

このように、資料の性格や考え方によってさまざまな考え方ができるため総点数を把握することは難しいのですが、基準を決めて早急に一つの結論を出したいと思っております。

'96年度展示案内

【晴れの装い】 4月5日～6月21日

世界各地の晴れの装いを、婚礼、祭礼、社交などの目的別に展示。日本は産着、七五三の祝着、婚礼の打掛など、アジアは婚礼衣装を中心とした各国の晴れ着、西洋はウェディング・ドレスとイヴニング・ドレス、東欧の祭りの衣装などを紹介します。

* 7月10日より8月3日は【ファッション創造の歩み10年展～文化女子大学服装学科ファッションショーア】を開催いたします。

【日本の服飾】 10月18日～11月29日

館蔵の日本関係資料の優品を展示。江戸時代後期の三井家旧蔵の小袖、彦根藩主井伊家旧蔵の能装束、公家装束の伝統を受け継いだ近代の宮廷衣装など当館の主要な所蔵品を紹介し、日本の服飾、染織の美を探ります。

【ブルガリアの女性と伝承文化～風土・こころ・暮らし展～】 12月20日～'97年3月14日

アジアとヨーロッパの接点に位置するブルガリアの女性の暮らしを、ブルガリア国立民族博物館所蔵の民族衣装や生活用具によって紹介します。農村や山村で母から娘へ伝える生活文化、信仰と伝行事、結婚にまつわる風習、伝統を生かした現代デザインなどをテーマに女性が中心となって伝えてきた民族文化をたどります。

*以上の予定は都合により変更されることがあります。

利 用 案 内

【開館時間】 平日：午前10時～午後4時30分／土曜日：午前10時～午後3時（入館は閉館の30分前まで）

【休館日】 日曜日・祝日・年末年始・夏期休暇／11月5日、6日／展示替の期間

【入館料】 一般300円・学生200円(20名以上の団体は一般200円・学生150円) 特別展は別料金

※文化学園の職員・学生は無料。また職員が同伴する方も無料。

文化学園服飾博物館だより 第9号

編集・発行 文 化 学 園 服 飾 博 物 館
〒151 東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL.03-3299-2387